

探検・探査

7号

1999年5月

横浜市立大学 探検・探査の会

探検・探査の会 第7号

目 次

21世紀と探検	会長 大野 正夫	1
バーチャル・リアリティと探検活動の将来	幹事長 小森 享二	2
洞窟へ行こう	関口有佳里	3
自己紹介	岡本やすひろ	4
富士山を案内して10年	宮崎 捷二	5
奥利根	松林 孝憲	7
ブラジル通信	小嶋 健太	10
ボリビア日本人移民100周年記念 奥アマゾン探検 趣意書		15
ボリビア探検資料1		19
2		22
98年 探検部活動報告		24
会員の近況		25
1999年度探検探査の会総会報告		27
1998年度探検探査の会会計報告		28
会員住所録		29
探検部学生住所録		31
編集後記		

21世紀と探検

会長 大野正夫

「探検・探査の会」ができて7年余りが立ち、歴史が作られつつあると感慨深いものがあります。この4月に生物学科の田沢先生が御定年になったお祝いの会が横浜であり、久しぶりに先輩・後輩の方々に会いました。探検部出身者も数人が出席しており、一様に元気が良く、少々顔・形が変わっていましたが、酒が入ると学生時代にもどり、寄付金廻りに歩いたことや離島での生活などが話題になりました。「おう一、貴方も探検部でしたか?」ということで、探検部出身者の輪ができました。やはり、同じ釜の飯を食った仲間という強い絆を感じたひとときでした。高松に後輩の松本君が香川銀行の取締役部長でありますが、中田君が栗田工業の四国支店長としてやってきたので、一夜飲み、学生の気分に戻り楽しく過ごしました。ひょっこり先輩の伊東さんから手紙が届き、寺島さんからは「知床は変わった!」と写真を送ってくるなど、最近になって、探検部の仲間との交流が活発になっています。

探検という言葉を発するのは、なにか恥ずかしいものがありますが、しかし、その響きは心地よいものです。60歳の還暦を迎えるという時に、もう探検することはないだろうとは言われそうですが、人生いつまでも探検心を持たねばと心に念じており、探検部の先輩、後輩との交流は、特別なものを感じる昨今です。

日本は21世紀に入る時に、"子育てと教育が国家存亡の鍵"と大きな話題になっておりますが、大学もたいへんな問題をかかえております。身を置く高知大学では、授業開始定刻に教室にいる学生は半分くらい、先生とすれちがって挨拶が出来ない者もあります。大学院入試の面接に、Tシャツで席に座った学生に、「ここをどこだと思う。もう少し、ましな服を着て来なさい」と言ったら、同席の先生から、「良く言ってくれた」とほめられました。近頃、クラブ活動に入る学生は極めて少なくなっています。周囲にいる学生にどうしてクラブに入らないかと尋ねると、「人間関係が面倒!」とい返事が返ってきました。女子学生に少し親切にすると、「セクハラーラー」と訴えられますので、女子学生には、特に気をつけて接しなければなりません。

このような時代に、横浜市立大学探検部の存在は極めて大事であると思います。探検部に入り同じ釜の飯を食い、山の登り、川を下り、海を渡ることなどをすることによって人の交わり方や探検心が身についてきます。探検部でごすることにより、21世紀の核となるひとに育てられると期待しております。

私は国際協力事業団 (JICA)から感謝状をもらいましたが、その理由は学生を青年協力隊に送り込んだことや海外から研修生を招いたことのようです。学生達を南太平洋の島やネパールに送った時に、両親が「大丈夫でしょうか」と心配顔で尋ねてきて、「大丈夫ですよ。2-3年で人間が変わって帰ってきますよ!」と元気づけると、「先生のお話を聞いて、安心しました」と帰りましたが、「親不孝をさせてしまったな」と胸が痛むこともありました。しかし、例外なく発展途上国で2-3年すごすと、たくましい体になり、いきいきとした顔をして帰ってきます。21世紀がこころ豊かな世の中になるのには、探検的心をもった者が、より多く育つことだと思います。若き「探検・探査」の会員に期待しております。

バーチャル・リアリティと探検活動の将来

幹事長 小森 享二

何だか大それたテーマを掲げてしまった。しかし、ここで言う探検活動とは大学探検部に関わる人間が行うレベルの活動を意味することを冒頭におことわりしておく。

さて、21世紀はもう目前に迫っている。我々の探検部の活動も今世紀の後半40年余り続いてきた。その間、科学技術は急速に進歩してきた。そして、目覚しい情報技術の発達によってバーチャル・リアリティ即ち、仮想現実、人工現実感というそもそも言葉から矛盾をはらんだような世界を作り出している。

私は探検という活動は未知の世界に生身の体を投入し、自分の五感を総動員してその環境、対象に向き合うことだと考える。それとは違ってバーチャル・リアリティという世界は人間本来の五感によって知覚するという行為そのものに対して、擬似的な経験と言われているが、全く異なった感覚を提供するものだと思う。そのような技術は使い方によっては人間本来の感覚を鈍らせたり、失わせたりする可能性がありはしないだろうか。バーチャル・リアリティが生み出される現代において現実と幻想の混同としか思えないような事件が特に若年層で発生している。これはこのバーチャル・リアリティという世界が象徴する最先端技術を生み出す時代背景と無関係ではないと思う。しかし、私は科学技術の進歩を全面的に否定するつもりはない。安全性を高めるために、探検活動に衛星を利用した世界中どこからでも通話できる携帯電話、自分の位置がどこか瞬時にわかるナビゲーション・システムなど私は大いに利用していいと思っている。

このような科学技術の発達により地球はいっそう狭くなり、地球上には地理的に未知な世界は存在しないと言われて久しい。しかし、生身の人間が足を踏み入れていない地域はまだ多く、また個人のレベルで考えれば、未知の世界は限りなく広がっている。私は21世紀になっても人間本来の欲求である未知の世界にわけいり、自分の眼で確認し、肌身で感じたいという思いが人々を探検活動に駆り立てることは変わらないと思う。

21世紀に向けてバーチャル・リアリティにまつわるテクノロジーは益々進展するであろう。かつて「ハイテク、ハイタッチ」という言葉が使われたが、その意味はハイテクが加速すればするほどハイタッチ（自然な接触、ぬくもり）が求められるということである。ハイテクの代表であるバーチャル・リアリティとは全く正反対なハイタッチ、即ち作り物ではないナチュラルな知覚を求める探検活動は人間本来の感性を侵す脅威から逃れる手段としても将来的に意味を持ち続けるであろう。

今夏、探検部の諸君がボリビアへ河下りに出かけるという。未知の世界に挑戦する全員がそれぞれ実り多き実体験を心の奥底に刻んで無事帰還することを期待している。

洞窟へ行こう。

関口 有佳里

洞窟がキレイだという人がなかなか多いようだ。むしろ好きな人なんてほとんどいないのかもしれない。狭いし暗いし怖いだなんて、すぐにでも発狂できそうな要素がそろっているし。私も別に洞窟が好きで好きでたまらないわけではないけれど、もしかしたらみんなには、そういう印象があるかもしれない。洞窟だけの合宿をしたり、地底湖が見たい見たいと言ってるから。でも私だって怖い。ヘッテンの電池が切れて一人取り残されたどうしよう、とか、奥から何か出てきたらどうしよう、とか、地震が起きたら…とか、想像するだけでおかしくなれそう。けれど実際にやってみて、いろいろな支洞を見つけたりすると、自然の迷路みたいでなかなか楽しい。本当に迷っちゃ困るけど。それと、の中では洞窟探検はいかにも探検部らしい活動だと感じるから、魅了されるのかもしれない。

前にテレビのニュース番組の特集で、地底湖潜入みたいのをやっていたことがあった。たどり着くまでがかなりハードで、それだけ技術を持っている人はあんまりいないと思われた。その分、地底湖にたどり着いたときの感動はすごいだろうと思う。エメラルドグリーンに澄んでいて神秘的な地底湖、今すぐじゃなくても、絶対いつか見てみたい。

といえば高校の頃の友達が福島県のマイナーな観光洞窟に行った話を思い出した。まず入り口で半ズボンとサンダルに履き替えさせるらしい。それからガイドのおじいかアルバイトのお兄さんについて行くんだけど、むこうは慣れてるからさっさと行ってしまって、後から必死でついて行かないといけない。したは水が流れてるし、全身びちょびちょになって凍えながら、頭も打ちながならでとても観光洞窟とは思えないんじゃないところらしい。ぜひ1度行ってみたいものだ。

自己紹介

岡本 やすひろ

探検部に入部してそろそろ2年たつ。今までのことを思い返してみると、楽しかったことでいっぱいである。青木が原の樹海を横断したり、洞窟に入ったり、沢を登ったり、山に登ったりいろんなことをした。1年の夏合宿は釧路川でいかだをつくって川下りをした。2年のときには九十九島湾をシーカヤックで渡った。どれも探検部に入らなければ絶対やらなかつたと思う。

しかし、私の心はまだ満足していない。思えば、私が入部したころ、探検部に対するイメージは、宝探しとか、秘境を探検したりという映画の“インディージーンズ”の様なものだった。が、実際にはそんなことはやらなかつた。1年のときの夏合宿を選ぶとき、アークを探す合宿もあったのに、結局は川下りの方を選んでしまつた。私は当初抱いていたイメージを否定してしまつた。

最近そのことを考えていると、このまま卒業して満足できるのだろうか？いや、できないだろう、と思いはじめてきた。そこで、今何をしたいかというと、砂漠を横断したい。しかもラクダにのつて。なぜこんなことを考えるようになったかは思い出せない。だがそれを実行できたなら、もう思い残すことはない、と思えるのである。とそこまで思つていながら計画はいっこうに進行していない。準備期間を考えると、そろそろ始めなければならぬ。頑張ろう。

富士山を案内して10年

1965年卒 宮崎 捷二

イギリス人女性を連れて

1990年7月4日(水)～5日(木)にかけての富士山行記録によると、小生以下5人で登っている。メンバーの1人にルース・ウェスト(Ruth West)の名が有る。当時私の勤めていた群馬県立伊勢崎東高校に英語助手として赴任していたイギリス人女性である。ルースの是非とも富士山に登ってみたいとの願望に、是非とも叶えてやろうと小生と同じ山岳部のもう一人の顧問と登山計画を立てる。夏休み時期だと混雑すると聞いていたし、小生にとって言えば、この年の夏には横浜市大天山踏査の会による“天山山脈トムール峰登山隊トレッキング班”に加わることになっていたしするので、急遽吾が高校の一学期末試験時を利用して実行に移すこととした。

7月4日、午前中の試験監督を終え、伊勢崎を12:30に発つ。関越自動車道・鶴ヶ島ICから一般道を経て、八王子ICから中央自動車道に入り富士吉田ICで降りる。途中食糧調達や自動車のトラブルなどもあり、時々の対向車のライトが黄色に滲む乳色のガスのスバルライン、五合目に着いたのが18:15。雨・ガスの動く中18:58に歩き出す、馬の糞の匂いを感じながら。19:26 六合目“雲海荘”、雲海が眼下に小規模だが広がる。時にははっきり、時には霞んで小屋の灯が上方へと続いて見えるようになってきた。“もうここいらで良いでしょう”20:34 七合目、標高2720m“日の出館”を宿と決める。文政9年の銅の茶釜の下がる囲炉裏が、やや冷え湿った身体を温めてくれる。江戸の寛政3年からの開業だという。小屋の客は我らだけ、持ち込みの酒も土間での火器も許してくれる。

7月5日、この小屋は東を向いているから“日の出館”だとのこと。空が幾色にも変わり棚雲の上に赤坊主出現を拝み、4:45 頂上を目指し2日目の歩行開始。しばらく歩くと一人が高山病の症状の頭痛と吐き気を訴えはじめる。返り見すれば眼下に富士吉田の街、山中湖はちぎれ雲の下。時どきイワヒバリの声姿。八合目 3100mからの山中湖は鏡のように眩しかった。若いドイツ人男女が、そしてカリフォルニアからの米国人男性が下って行く。いつの間にか5人5様のペースで進む。ドイツ人父子3人連れらが下って行く。本八合目 3400mからは勾玉の如く山中湖は静まる。久須志神社頂上3720mに8:38 トップ着、喘ぎ喘ぎのラストは40分遅れだった。感激のルースと握手抱擁。お鉢巡り発9:54、残雪の火口原、多数の宇宙線観測装置の鉛板あり。10:40 剣が峰3776mに立つ。青を背に白く静まるドーム。お鉢巡りを終える頃、いつの間にか西方からの雲が上空を舞い始めている。12:15 大鷲になった気分で、眼下に広がる大空間に向かって動き出した。

奥利根

松林 孝憲

私が探検部に入部し山登りを覚えてから、今で7年が経つ。当時も月日が流れるにつれ山に対する憧れは、増していった。憧れは、国内から海外へ、スタンダードな山登りから極限の登山へと。

いろいろな登山思想にも影響を受けたのも確かだ。古くはママリズム。その中に潜む孤高な存在に酔いした。だが中でも学生時代の私の頭を長らく支配したアルピニズムに最も強い影響をうけた。「鉄の時代」を生きた当時のクライマーにあこがれ、ヒマラヤの巨峰を夢見、ヨーロッパアルプスやヒマラヤで行われた数々の登攀に自分を投射した。私は、今世紀からの登山、とりわけ岩登りの歴史やその潮流への関心は人一倍強かったと思う。北壁・無酸素・アルパインスタイル・ヨセミテ・厳冬期・フリー・エイド・ナチュプロ・R・T・フロレス等々。ちょっとでもキーワードとなるものを見つけると、貪欲に吸収し「やっぱボルトよりナチュプロだよー」と、早速使って自分でも訳の分からぬことを言っていた。しかし今冷静に考えると、私が大学生の時はもうアルピニズムなど声高々に叫ぶ輩なんて存在せず、既に過去の物となりつつあるのが現実だった。第一に私自身、その実像がよく分かっていなかった。要するに孤高の存在感をかもし出す浮き世離れした話に酔っていたのだろう。そしてカリスマ的雑誌、その名もずばり「岩と雪」も事実上廃刊になったし‥。

ニセアルピニストだった？私は、一年ほどの山登り導入期間後、アルピニズムのセオリー通り岩登りを初める。少し前に吉見氏が登ったという理由だけで、このとき最初に目標したのが北アルプスの屏風岩。パートナーも私もお互いズブの素人だったので、手始めに数回の鷹取山でのトレーニングを行った。その次はクライミングの手引書を片手に御坂山塊三ッ峰での三泊四日の見様見真似のクライミング合宿。そして次は当然のごとく屏風岩に向かったのだが‥しかしこれがいけなかった。岩登りの前日、時間があったので屏風岩の偵察に向かった‥はいいものの、この時それが人生で三番目に見た「岩」だった。ほんと、屏風の様にそそり立ち、登る前から大きな壁にブチ当たっていた。翌日の岩登りは、当然敗退‥、ルートを完全に見失ったあげく、しかも大墜落と浮石にはさまれ足に怪我というオマケ付き。今思うと、まったく何も知らなかった。装備も技術も、何せこの時ザックの中には当時のマイ・バイブル 文部省編「高みへのステップ」がボッカの石のごとく鎮座していた。そんなことでこれまで屏風岩には行っていない。

2年前から埼玉にいるが、ここにきた当初は「ダさいたま」と多少敬遠していた。しかし2年も経つとここの魅力も徐々に分かりはじめ、今では埼玉も「捨てたもんじゃない」とまで思うようになってきた。その分かり始めた魅力の一つが、埼玉の川の存在である。今まで以上に川というものを意識したことはなかった。利根川・荒川と私の身近にこれらの川が存在する。埼玉を東西に移動すると、それらに架かる橋を必ず通ることになり、その度に川は、私の想像力を刺激する。仕事をサボって利根川の河川敷に車を止めてイップク。目の前を流れる利根川は、必ず最初の一滴から始まる。その一滴が大きく膨らみ、この利根川の水はどこから来たのか、そこの世界は、どのようなところか、と私を刺激する。迫りくる夕日と定時を気にしつつも、一人タソガレる私は、利根川更にはその源流部・奥利根に思いを馳せる。

次はどこに行こうかと考える。そんな時、きまって頭をよぎるのが奥利根という言葉。この言葉に強い憧れも持つようになってきた。私の近くを流れる坂東太郎こと利根川は、上越国境の大水上山から一滴が生まれ、千葉の銚子で太平洋に注ぐ。この利根川源流部を奥利根というのだが、定義ははっきりしていない。登山界で定義した場合、一般的のそれより狭くダム湖の奥利根湖と権俣湖を囲む山域となる様だ。お隣の谷川岳や尾瀬は含まれない。このように限定されたせまい地域だが、この奥利根は私を魅了

してやまない。湿原・滝・渓谷・湖・山と、日本の自然が凝縮され、今だに色褪せない野生味が、そこにある。ちょうどお隣の谷川岳、尾瀬を明と捉えるなら、奥利根は暗、そして闇となるだろう。道なき稜、深い森、渓の食い込み、幽玄を醸し出しつづける。同じ利根川流域にありながらここまで相貌の異なる山塊、どれも独自の魅力を保ってはいるが、奥利根はその中でも異彩を放ち、凛として存在する。

奥利根は、孤絶の地と聞くが、ここには峠を越える道というのが確かにあまり存在せず、昔から一般の人間を拒絶し続けていた。あの黒部川を抱く後立山連峰でさえ昔から峠越えの道が存在していたのである。また2000m前後の山岳とはいえたが日本の脊梁山脈であり、冬には非常に厳しい気象条件になる。その場所そしてその厳しい気象条件が奥利根を今でも原始の香りを漂わせる要因の一つとなっている。幾分人の臭いが強くなった感のある日本の山岳の中でも珍しい存在の一つだと思う。しかしその奥利根が今だに強烈な野性を維持できた最大の理由には、人間とのある一つの関わりを持った、いや、持たされたからだろう。過去に何度か人間との関わりによって生まれた転機が、確かに奥利根の運命を変えた。明治の頃はまだ、利根川の水源調査探検が数回送り込まれたにとどまり、まだまだそこは深いベールに包まれていた。しかし転機としての第一波が、昭和の初めの水上までの上越線開通とともに押し寄せた。上越線開通は、谷川岳を身近な山「近くて良き山」とすると同時に、奥利根にも多くの人々を誘った。この時から奥利根で「登山」が本格的に行われ始め、旧制高校などの精力的な活動が記録に残る。これ以後、日中戦争勃発の翌年まで奥利根での登山記録が残っている。話はそれるが戦時下での登山、これは、当時の人たちの情熱にただ平伏してしまう。その後は世界大戦によって中断という形になったが、やはり人々の情熱は失われてなかった。戦後は社会人山岳会によって組織的に奥利根が探られ、徐々にそのベールを明らかにされていく。利根川の水源が確定されたのもこの頃だ。だがここに奥利根にとって非常に大きな転機が訪れ、その後の運命を決定付けることになる。昭和40年の矢木沢ダム完成である。ダムによって道が分断され、奥利根源流部には容易に近づけなくなってしまった。奥利根湖を船で渡るか、殆ど消えかかった長い湖岸道を歩くか、それしか入山の方法がない。まして冬はまさに孤絶の地となる。奥利根は皮肉なことに、原始の香りを文明がもたらした圧倒的な物量によって封印してしまった。奥利根の原始の香りに憧れることは、ダムという、奥利根の中ではきわめて人間臭い、文明の産物も許容せざるを得ない。ダムは、奥利根へのアプローチを厄介なものにし、また奥利根の野性を守る牙城のように私たちの前に聳え立つ。

今まで奥利根について知ったようなことを書いたが、正直私は、本物の奥利根を知らない。今まで私の視界の中に奥利根の山々が映し出されたことが、あるかもしれない。だけど私にとって奥利根は未知の領域、いや聖域もある。その東となりの山群・谷川岳なら何度もいた。しかし谷川岳から山稜を一つ二つ越えたところに広がる奥利根、魑魅魍魎が棲むという奥利根を、私は未だ知らない。触れたことも見たこともない奥利根に対する私のイメージは少々誇大妄想に近いかもしれない。事実ほとんどの谷は探られ、冬期においても主要な稜線はトレースされ続けている。しかしそんなことはまったく問題ではない。なぜなら、非情な事にあのダムの存在が、結果として奥利根の存在を常に新鮮にしてくれる。奥利根がダムによって封印されたように、私の奥利根に対するイメージもいまだに浮き世離れした存在として封印され続けている。

歳月が経つにつれ山岳への憧れが容を変えて変わるが、どの憧れも同時に私の中で存在し、正直捨てきれないでいる。未だにニセアルピニストである私は、ある思いを込めて、今年の夏北アルプスの屏風岩に行こうと思う。始めて行った時から5年がたった。あれからまだ一度も屏風岩を見ていない。今度は大丈夫だろう。2度目の屏風岩。憧れで終わらないためにも。

奥利根周辺概念図



ブラジル通信

小嶋 健太

ブラジル人はピアーダが大好きだ。

ピアーダとは日本語に訳せば「小話」といった意味合いで、なんかの集まりがあると(仕事の会議でも)それぞれ自慢の傑作を披露し、男も女も一緒に大笑いする。

私の知る限り、ピアーダの系統は大きく2つに分けられる。一つはエッチ系のもので、これが最も多い。もう一つが誰かスケープゴートを作つて小馬鹿にするもので、多くは旧宗主国(ポルトガル)人がやり玉に挙げられる。

比較的面白い物を以下に紹介してみよう。

小馬鹿系

その1

アマゾンの奥地には、まだ人食い人種がいるらしい。

ある時、一人のブラジル人がそんな彼らの部落に迷い込んだ。

部落の中に一軒の売店がある。

フトの覗いてみると、なんと人間の脳みそをビン詰めにして売っている。品揃えは日本人・ドイツ人・ポルトガル人だ。

ブラジル人は店主に尋ねた。

「君らが人の脳みそを吃るのはわかるよ。でも不思議なのは値段だね。これを見ると安いほうから順番に日本人・ドイツ人・ポルトガル人となっている。どう考えても日本人の脳みその方が上等だと思うんだが。」

店主は答えた。

「わかつてないなお前は。日本人の脳みそを見てみろ。使い過ぎで色艶が悪くなってるだろ。こんな物、高値で売れやせんよ。それに比べてどうだい、ポルトガル人のやつは。まるで新品同様だろうが。」

その2

3人の犯罪者に独房禁固10年の刑が言い渡された。彼らは10年にの間、食事の受け渡し以外、外界との接触を禁止される。

これを可哀想に思った刑務所の所長が言った。

「それぞれ一つだけ望みを言え。なんでも聞いてやろう。」

そこで3人の受刑者はそれぞれの望みを述べた。

ドイツ人は言った。

「俺はビールなしでは生きて行けません。どうか10年分のビールを下さい。」

イタリア人は言った。

「女がいいです。女なしでは気が狂ってしまいます。」

ポルトガル人が言った。

「タバコを下さい。それさえあれば他は何もいりません。」

所長は望みをかなえてやった。

10年後、晴れて出所の日。

まずベロベロに酔っ払ったドイツ人が出てきた。

「ウイック。ここはどこだー？天国かー？」

次にげっそりやつれたイタリア人が出て来た。

「もう俺は女なんかいらない…。」

最後がポルトガル人だが、彼は出て来るなり目を血走らせて所長に詰め寄り一言叫んだ。

「すみません、ライター貸して下さい！」

エッチ系

その1

あるところにパウロとマリオという、とても仲の悪い双子の兄弟がいた。満1歳である。パウロはいつもお母さんの右側のオッパイ、マリオは左側のオッパイを占有していたが、マリオは常々これを一人占め出来ないものかと考えていた。

考えつづけたマリオはついに明案を思いついた。

「そうだ、お母さんのオッパイに毒を塗つておけば、パウロのやつはイチコロだ。」

ある晩のこと、彼は右側のオッパイに密かに毒を塗りつけた。

翌日目が覚めると、お母さんがシクシクと泣いている。マリオは期待に胸をふくらませて尋ねた。

「どうしたのお母さん？」

お母さんは答えた。

「昨日の晩、お父さんが死んじやったのよ。」

その2

双子の兄弟が居た。まだお母さんのお腹の中である。弟が尋ねた。

「ねえお兄ちゃん。もうすぐぼく達外へ出るみたいだけど、ちょっと不安だよね。どんなところなのかな？」

兄が言った。

「そうだな。じやあちょっと俺が探検してくるよ。」

しばらくして兄が帰つて来た。

「オイ、外はなんだかひどい所だぜ。ジメジメ湿つてている上に、そこらじゅうブッシュだらけだ。」

弟が言った。

「そうかー。だから時々ヘビが入つてくるんだね。」

その3

アメリカ人の3人組がブラジルを旅行していた。3人ともコンドームを買いたかったが、

ポルトガル語がわからない。

一人が言った。

「英語でなんとかなるだろ」

彼は金を持って薬局に入っていったが、すぐに戻って来た。

「ダメだ。全然通じない。」

次に2人めが金を持って入って行った。

「やっぱりダメだ。身振りでやってみたが、わかつてくれない。」

「しようがないな、まあ俺にまかせておけ。」

自信満万で入って行った3人目だが、しばらくするとガックリ肩を落として帰って来た。

見ると金も持っていない。

「どうしたんだよ。金も持っていないじゃないか。」

けげんな顔の二人に、彼はうなだれて説明した。

「俺は自分の持ち物を取り出して、金と一緒に台の上に置いたんだよ。そしたらあのヤロウ、自分の物をドシンと俺の横に並べて…、それからニヤッと笑って金を取っていきやがった。」

「ブラジル人の気質」

ブラジル人と聞いて、あなたはどのようなイメージを思い浮かべるだろう。

一般的には「陽気」「いい加減」「享楽的」「サッカーとサンバが大好き」といったところだろうか。この見方は、日本人との比較においては大筋正解だと思う。しかし実はこれ、ブラジル国内における「カリオッカ(リオっ子)」のイメージなのだ。

日本と同じで、ブラジルもやはり地域事にそれぞれ気質の差異がある。

なにせ大きな国だ。

先日天気予報を見ていて、妙な違和感を憶えた。

別に日本の天気予報と違いがある訳じゃなく、可愛いお姉さんが「アマゾニアは明日晴れるでしょう」とかやっている。

「でも、ちょっと待て。アマゾニア州っていうと、確か本州の5倍の大きさがあるはず…。」

違和感の原因はこれだった。

日本の真ん中、長野あたりにポコンと晴れマークがあつて「明日は日本晴れでしょう」と言っているのと同じなのだ。ちなみに隣にパラ州(本州の約3倍)は曇りになるらしい。

話しを戻す。

当地で気質の話しをするとき、よく引き合いに出されるのはパウリスタ(サンパウロ州人)・カリオッカ(リオ州人)・ミネーロ(ミナス州人)の3者である。ブラジル経済の主要部分はほぼこの3州で占められているので、引合に出されることも多い。

各州毎の特徴を一言で言うと、産業のサンパウロ・資源のミナス・観光のリオとなる。順に解説していこう。

まずはパウリスタ。

サンパウロはブラジル経済の中心で、日系人の比率も非常に多い。だからという訳でもないだろうが、住民は(ブラジルにしては)勤勉で、「仕事をするならサンパウロ」と言うのは衆目の一致するところだ。大阪と姉妹都市協定を結んでいるが、むしろ東京の雰囲気に近い。リオから出張していくと、車が一列に並んで走っていることに感動をおぼえる。

パウリスタの一般的なイメージは、勤勉・まじめ・お金がすき・合理的といったところ。ただしあくまでブラジル国内比較において、である。

次に私の住んでいる地域住人であるカリオッカ。

狭義のカリオッカとはリオ市の住民に限られる。彼らはブラジル国内においても特別視されており、その特徴は歌にも歌われているほどだ。イメージは最初に出てきたごとく享楽的・いい加減・陽気・お洒落と、パウリスタとは 180 度逆となる。そう言えばカリオッカの歌には「赤信号が嫌い」という歌詞が最後に出てきた。実際に歩行者も車も、信号を全然守らない。

「仕事をするならサンパウロ」に対して「住むならリオ」というのも、衆目の一致するところである。風光明媚なリオは、確かにのんびり暮らすにはとてもいいところだろう。

ミネーロはどうか。

ミナス州なんてほとんどの人が知らないと思うが、リオ・サンパウロと隣り合わせにある鉱物資源を豊富に有する州で、経済規模はそれなりに大きいが、両者に比べるとかなり田舎である。気質もその通りで、無口・内気・思索的・ケチンボとなる(これもあくまでブラジル国内比較である。日本と比べたら正反対になるかもしれない)。

ただし「ミナス美人」という言葉があるくらいで、ミネラル豊富な水で洗われた可愛いお嬢さんを大量に産出する。州都のベロホリゾンテを歩いていると、リオやサンパウロではまず見られない可憐な雰囲気の女の子を頻繁に見かける。一説によるとここの男女比率は 1 : 4 とかいう話した。そのうちミナスに移住しようかと考えている。

さてブラジル人はピアーダという小話が大好きだ。中にこの 3 者の性質を表した作品があるので紹介しよう。

ある夜のこと、ブラジル全土が大停電になった。当然あたりは真っ暗である。

その時ミネーロは考えた。

「これはいいチャンスだ。ここは一つ、日頃なかなか出来ない思索にふけるとしよう。」

そうしてミナス州では一晩の内に、哲学や物理学の新しい学説が生み出された。

一方カリオッカは考えた。

「これはまたとないチャンスだ。」

リオの夜は奇妙なぎわつきと供に過ぎて行き、10 ヶ月後に大量の子供が産み落とされた。

パウリスタはつぶやいた。

「しょうがないな…。」

彼らはヨッコイショと立ちあがり、おもむろに自家発電機のスイッチを入れた。

「お尻の話し」

ブラジル人の男は女の子のお尻が好きだ。それも大きなヤツが好きだ。

「ブンブン グランジ(大きいお尻)」は「ゴストーザ(おいしそう)」なのだそうだ。

胸の大きさはあまり気にしない。

逆に日本人は、一般的にお尻よりも胸を気にする傾向があると思う。米国(←ここに住んでいると「アメリカ」と書くのはちょっと抵抗がある)も圧倒的に胸が優先だろう。

先日ブラジル人の友人とお尻・胸談義をしていた時のことだ。

何気なく「俺は日本人だけど、重要なのはお尻だと思うぞ」と言ったところ、友人は「おまえもブラジレイロ(ブラジル人の男)と一緒に！」と一声叫んで激しく握手を求めてきた。仲間として認められたようで少し嬉しかったが、実は私の「お尻好き」は、彼らの「お尻好き」とは少し意味合いが違う。

一般の日本男子にとってお尻は基本的にウエストとセットで鑑賞されるもので、そこについたるまでのくびれがとても重要だろう。

しかし彼らにとっての感心は徹頭徹尾「お尻」、しかもその「大きさ」に集約されている。そしてそれにつながるウエストにはあまり感心がないのである。くびれていようが、そのままズドンとつながっていようがあまり問題じゃないのだ。

男がそうだから、当然女子もウエストの事なんか気にしない。だから街を歩いていると、へそと一緒にたるんだお腹をさらけ出した女子達が、わがもの顔で歩いている姿をよく見かける。

女子にとっては、日本よりも遙かに住みやすい地域かもしれない。

ボリビア日本人移民100周年記念 奥アマゾン探検

1999年2月14日

趣意書

主催・ボリビア100周年記念実行委員会

横浜市立大学探検部

駐日ボリビア大使館

計画概要

今から100年前、南米ペルーに契約移民として渡り、期待とほど遠い現実の中にあつた日本人の一部は、当時のアマゾン川に起つた天然ゴムブームに惹かれ、よりよい条件を求めてアンデス山脈を徒步で越えてアマゾンへ入つた。さらには筏によりタンボパタ川、マードレ・デ・ディオス川を下りボリビアのゴム栽培地域へと旅をし、最初の日本人ボリビア移住者となつた。

そして今年日本人ボリビア移民100周年を迎えるにあたり、その記念行事の一つとして彼らが実際に旅した川を辿る。それにより100年前の多大な苦難に満ちた旅とそれを行つた日本人の存在や彼らの持つていたエネルギー等、その歴史に光を当て、かれらに対する敬意を表する。また同時に日本とボリビアのより一層の相互理解・友好を深める。これらを目的として、駐日ボリビア大使を中心とするマードレ・デ・ディオス川下り実行委員会によりこの川下りが計画された。

川下り隊は、駐日ボリビア大使と横浜市立大学探検部員を中心とした、日本人とボリビア人の約20名により組織される。そしてペルー東部のアマゾン地域の中心地プエルト・マルドナードより、マードレ・デ・ディオス川を、約600km下流に位置する100年前に移民がたどり着いた地域の現在の中心地であるボリビアのリベラルタまでを川下りの行程とする。約三週間の日程で、時速5km一日あたり行動時間6時間のペースで手漕ぎカヌーにより下る。

隊は8月上旬にプエルト・マルドナードに集結し、当地にて現地調達分の食糧・医薬品・装備の購入、最新の川に関する情報の入手、隊員の現地の気候への順応、隊全体での最終的な救助訓練などを行い、服用したマラリア予防薬が有効になり次第出発する。

10艇のカヌーとボリビア海軍のサポート船からなる隊は、まず100km下流の国境を目指し、途中の川原で野営しつつ、出発より約3日でボリビアへはいる。その後カヌーの特性を生かして、時には本流を離れて支流を探検しながら、途中日系人の住む集落などを訪れ、難所であるベルデ・カマチヨの2つの瀬を越えて、出発より約2週間で途中の集落の中で最も大きいセナにつく。そこで食糧・水などの補給を受けた後、ゴールのリベラルタまで約1週間で下る。

リベラルタにおいて現地の日系人会による式典に参加した後、サンタクルスに空路移動し、現在のボリビアにおける最も重要な日系人社会の1つであるサンファン移住地を表敬訪問し全日程を終える。

＜行程および日程＞

8月2日	月	成田→マイアミ→リマ	8月2日
		→グループ2	→グループ2
8月3日	火	リマ→クスコ	リマ→クスコ
8月4日	水	クスコ滞在	クスコ滞在
8月5日	木	クスコ滞在	クスコ滞在
8月6日	金	クスコ→インカ道トレッキング	クスコ滞在
8月7日	土	インカ道トレッキング	クスコ滞在
8月8日	日	インカ道トレッキング	クスコ→マルドナード(準備)
8月9日	月	インカ道トレッキング→バス	準備
8月10日	火	バス	準備
8月11日	水	バス→クスコ	準備
8月12日	木	クスコ→ペリビリヤ	準備
8月13日	金	ペリビリヤ→訓練式典	備考
			距離
8月14日	土	ペリビリヤ発	100km
8月15日	日	↓	
8月16日	月	↓	
8月17日	火	ヒース着	
8月18日	水	ヒース発→チベ塔	30km
8月19日	木	チベ塔	90km
8月20日	金	チベ塔	着あり
8月21日	土	モンテペルテ着	
8月22日	日	モンテペルテ発→ブエリトアリカ着	30km
8月23日	月	ブエリトアリカ発→バリビリヤン着	40km
8月24日	火	バリビリヤン発→カマチヨ着	16km
8月25日	水	カマチヨ着	50km
8月26日	木	↓	
8月27日	金	↓	
8月28日	土	↓	
8月29日	日	セナ着	
8月30日	月	セナ発	50km
8月31日	火	セナ着	補給可・車通行可・飛行場あり・サンファン日系人駐別予定
9月1日	水	セナ→ブエルトマルラビ着	
9月2日	木	ブエルトマルラビ発→ブエルトベネシア着	30km
9月3日	金	ブエルトベネシア発	60km
9月4日	土	ブエルトベネシア着→ブエルトサンハシロ着	
9月5日	日	ブエルトサンハシロ着→ブエルトカンタリア着	30km
9月6日	月	ブエルトカンタリア発	補給可
9月7日	火	↓	
9月8日	水	↓	
9月9日	木	リベルタ着	記者会見
9月10日	金	リベルタ	式典
9月11日	土	リベルタ→サンタクルス	
9月12日	日	リベルタ	式典
9月13日	月	リベルタ	日系移住地訪問
9月14日	火	リベルタ	日系移住地訪問
9月15日	水	リベルタ	帰国準備
9月16日	木	リベルタ→マイアミ	
9月17日	金	マイアミ→成田	

・1日6時間行動、平均時速5km/hとして算出。

ボリビア - 日本両国探険隊がウンガス地方とアマゾンへ

ボリビア人、日本人計24名からなるグループが8月1日からの1ヶ月半で大自然のウンガス地方、ボリビアアマゾンを探険する計画を立てている。

グループは非常に困難で、危険を伴う旅に備え、若者やスポーツマンで構成されている。日本人大学生14名、町田酒造(この企画の後援)から3名、ボリビア自転車競技連盟会長、イヴァ エテロウイック氏、ボリビアのスポーツマン5名と、軍隊から2名(ジャングルに熟知している者)が参加する。

日 程

探険計画によると、8月の第一週に第1グループがラ・パスのウンガス地方のエル・チヨーロとチャイロ間のインカ道を踏破する予定。そのインカ道には、1958年よりウンガスの山岳地方に住みついているある日本人院者を訪ねるという目的がある。

第2グループは8月8日か9日頃からアマゾン探険に向けマレドナド港から出発する予定。

エテロウイック氏によると、約800kmに渡る旅を達成する為、カヌー、小型舟、自転車が使用される予定だ。

探険隊はマドレ・デ・ディオス(リ)のマレドナド港からリベラルタ迄の600km以上を下る。このルートを2人乗りカヌー12台で"ヌエバ・エスペランサ"迄

下り、そこから支流のマヌリピリに入る。エル・カイロを囲む沼地を渡り、エル・セナ川を渡り、再びマドレ・デ・ディオス川に戻る。

エル・セナではサンタクレスのサン・ファン移住地の日本移住民(日系)が食糧を補給することになっている。

駐日ボリヴィア大使館

昨日、駐日ボリヴィア大使エウドーロ・ガリンド氏は彼の指揮の下でボリヴィアアマゾンの環境の向上の目的と共に、この旅を実現することを発表した。

エウドーロ・ガリンド氏によると、1998年9月にほぼ同じ行程を事前調査したグループの情報により、このコースは「完全に破壊されていてもはや動物さえいない。」と言っている。

その為も、アマゾンのジャングル奥深くに入って動植物群を見てみたいとも語っている。

Una expedición boliviano-japonesa recorrerá los Yungas y la Amazonía

Una delegación de 24 personas entre japoneses y bolivianos se apresta a realizar por espacio de un mes y medio, desde el próximo 1 de agosto, una expedición por los Yungas y la Amazonía boliviana con fines científicos y de medio ambiente.

El grupo está conformado por gente joven y deportista a fin de so-

portar una travesía muy difícil y riesgosas. Son 14 universitarios japoneses, 3 funcionarios de la empresa Machida So Shu Ltd (patrona del programa), el presidente de la Federación Boliviana de Ciclismo, Ivo Eterovic; cinco deportistas bolivianos y dos oficiales del Ejército (expertos en sobrevivencia en la selva).

El calendario

Según el calendario de la expedición, la primera semana de agosto, un grupo recorrerá el camino del Inca entre El Choro y Chairo en los Yungas de La Paz, con el propósito de conocer la región y visitar a un ermitaño japonés que en 1958 se retiró a meditar en medio de las serranías yungueñas.

El segundo grupo estará listo en Puerto Maldonado para iniciar desde el 8 o 9 de agosto con la expedición por la Amazonía boliviana.

Para el recorrido, según Eterovic, se utilizarán motorizados, canoas y bicicletas para cubrir aproximadamente 800 kilómetros de ruta.

Los expedicionarios navegarán más de 600 kilómetros en las aguas del río Madre de Dios, desde Puerto Maldonado hasta Riberalta. Esta ruta se hará en 12 canoas de 2

personas cada una por el curso de agua que se internará hasta Nueva Esperanza, para tomar el río Manuripi, atravesando los bañados que rodean El Cairo, hasta retomar el río Madre de Dios por el río El Sena.

En El Sena se cumplirá el reaprovechamiento que dotarán los emigrantes japoneses (Nikkeis) que residen en la Colonia San Juan de Santa Cruz.

Embajada boliviana en el Japón

El embajador boliviano en el Japón, Eudoro Galindo Anze, informó ayer que está confirmada la realización de esta travesía bajo su iniciativa y coordinación con el propósito de un levantamiento de las condiciones del medio ambiente en la Amazonía boliviana.

Galindo Anze dijo que se sabe por el informe de un grupo de avanzada que hizo un recorrido casi similar en septiembre de 1998, que el curso del río "está totalmente de predado y ya no hay ni siquiera vida animal; por lo que se tiene que hacer un recorrido al interior de la selva amazónica en esa región, donde se procurará encontrar fauna y flora en estado silvestre".



Ivo Eterovic, presidente FBC.

ボリビア日本人移住100周年を記念



ボリビアの地図を見て川下りのルートを確認する
横浜市大探検部の学生ら=横浜市金沢区瀬戸で

南北ボリビアへの日本人移住百周年を記念し、横浜市立大学探検部の学生たちが今夏、ボリビアの山岳地帯アマゾン川上流のマドレ・テ・ディオス川を約一ヶ月半かけて踏査する探検に挑む。駆けボリビア大使を含むボリビア側の参加者らの総勢二十三人の合同探検隊を結成。百年前に移住者がたどった苦難の足跡を追いかたちで、同国北部を西から東に流れ約六百キロをカヌーで下る。学生たちは「川下りを成功させるだけでなく、現地の人たちと交流を深めたい」と、最終的な準備を進めている。

中心メンバーは同探検部の男子六人、女子三人。三年生の片平吉秀さん(二年)が横浜市緑区が日本本隊の隊長を務める。ほかの日本本隊の隊員は中央大学と拓殖大学の学生三人、スポンサー企業の社員一人。ボリビア側はエウドーロ・ガリンド駐日大使(五十九人)。

国本伊代・中大商学部教授(ラテンアメリカ近現代史)によると、日本からボリビアへの移住第一陣は、一八九九年に横浜港からペルーに移り住んだ約七百九十一人の一部。ペルーの農園で過酷な労働を強いられたため、陸路でボリビアに入った。その後、急しゆんな山や川、密林を命がけで乗り越え、天然ゴムの生産地を目指す人が相次いだという。計画によると、日本本隊は八月二日に成田空港を出発。先遣隊六人が五日目にボ

来月、市大探検部員ら

十五日から一人乗りのカヌーに分乗し、マドレ・デ・ディオス川を下る。十九日に国境を越えてボリビアに入る。三十日かけて、ブラジルとの国境に近いリベラルタまで行く。
昨年八一九月、エンジン付きの船で視察した片平さんによると、川幅は百五十〜一百五㍍くらいで、川岸の多くは密林に覆われている。川にはピラニアや毒ヘビが生息。資機材運搬などのため、同国海軍の船が同行することになってい

リビアとの国境に近いペル
ーの「ペルト・マルドナド
市に着き、情報収集などの
準備を始める。残りの八人
とボリビア隊は、首都ペ
ルー郊外の険しい「インカ
道」（標高四〇〇〇—一〇
〇〇〇㍍）を三日三晩トレンツ
キングした後、十四日同
市で合流する。

方問
ガリンド大使が昨春、川
下りの企画案をボリビアの

道中、日本人移住者を訪ねて親交を深めるほか、ボリビア隊は川の水質調査もする。

る。

アマニ上流 600円

カヌーで約1カ月、移住者訪問も

片平さんは「大自然に向かって百年前の人たちの熱意を体感したい」。三年生の福栄太郎さんは(10)同市金沢区には「ボリビアをよく知ることで、日本や自分を見つめ直したい」などと話している。

ボリビア大使館による
と、現在、同国にいる日本人
や日本人移住者は約二万
人。ガリンド大使は一九九
七年にペルー東部で川下
りをしていて早稲田大学探
検部の学生二人が兵士に殺
害された事件を挙げ、「今
回の川下りを成功させ、現
地の安全面や自然の素晴ら
しさを日本人に訴えたい」
と言っている。

時 南米との貿易に携わっていた検査部OBが記事を見つけ、現役部員に知らせた。

新聞に載せたことが今回の探検のきっかけだった。当時、東洋この貿易工場の

ガリンド大使が昨春、川下りの企画案をボリビアの

道中、日本人移住者を訪ねて親父を深めるほか、ボリビア隊は川の水質調査もする。

98年度 探検部活動報告

熊野川合宿	4月29日～5月2日	荻野諭 末永真雅 本間俊一 熊原武博 中村淳一
新入生歓迎合宿 in 樹海	5月14日～17日	岡本安洋 関口有佳里 本間俊一 千葉香澄 末永真雅 塚本裕美 高井主税 室小野花 片平吉秀 大石亜希子 中村淳一 熊原武博 小山久美子 門間奈々 本多肇 谷勝由香 野呂亜希子 若生啓
荒川激流下り	5月30日～31日	荻野諭 平塚洋介 高井主税 本多肇
三浦半島1周サイクリング	6月19日	岡本安洋 末永真雅 榎本幸恵 谷勝由香 下田麻衣
丹波川本流沢登り	7月2日～3日	片平吉秀 末永真雅 門間奈々 室小野花 本間俊一 若生啓 谷勝由香 谷口剛史
丹波川小室川谷沢登り	7月4日～5日	岡本安洋 片平吉秀 熊原武博 千葉香澄 本多肇 野呂亜希子 下田麻衣 戸田亮介
江戸川川下り	8月1日～2日	片平吉秀 本間俊一 本多肇 若生啓 中村淳一
天塩川川下り	8月9日～18日	片平吉秀 熊原武博 本間俊一 本多肇 若生啓
北海道自転車ツーリング	8月16日～25日	岡本安洋 榎本幸恵 下田麻衣 谷勝由香
屋久島登山合宿	8月22日～24日	関口有佳里 荻野諭 塚本裕美 高井主税 中村淳一
夏合宿IN六島	8月27日～30日	高井主税 関口有佳里 塚本裕美 中村淳一 門間奈々 小山久美子
奥アマゾン偵察隊	8月29日～9月20日	片平吉秀 熊原武博
南アルプス合宿(北岳～聖岳)	9月5日～14日	若生啓 平塚洋介 星川亮
奥秩父登山合宿	10月23日～26日	岡本安洋 熊原武博啓 若生啓 野呂亜希子 千葉香澄
M T B合宿	11月12日	中村淳一 岡本安洋 室小野花
倉沢鍾乳洞	12月13日	関口有佳里 中村淳一 室小野花 門間奈々 下田麻衣 若生啓 本間俊一 松林孝憲

会員の近況

総会出欠のはがきの近況欄に書いた方です。

宮崎捷二さん

返事遅れてごめんなさい。やりくりをしてみても、出席が無理になりました。元気で山岳部のコモンをやっています。1年生の担任となりやや多忙です。みなさんによろしく。インカ・アマゾン川下りの計画は順調ですか。

師井佳子さん

不景気なので比較的ゆったりと過ごしています。(でも土曜日はしごとなのです)。ユーゴ情勢を見るにつけ、早く人類が過ちに気づくよう祈るような気持ちです。ボリビア、どうぞ気をつけて、いってらしゃ下さい。

野口道章さん

本年度より勤務地が名古屋より静岡に変わり、現在平日は静岡市にて単身赴任の生活をしております。

ご無沙汰しておりますが、みな様お変わりございませんか。春になりましたので、また少しずつトレーニングを始め、夏山に向けて調整しようと思っている今日今頃です。

(E-mail Michiaki.Noguchi@fujixerox.co.jp)

星川 亮さん

今年は修士の2年です。現在就職活動中のため今回の総会には出席できないと思います。

大下好憲さん

磯釣り・自転車(ロード・MTB)でのサイクリングと忙しい。

今年2/10 黒鯛42cm釣った。自転車は、やり始めて8年目に入った。体力のオトロエはイカンともしがたいが、まあ月間目標400kmは達成したい。

昨年350kmの実績あり。尚最初の始めた年は1万km年間で走った。

大槻英二さん

この4月で勤続10周年。2週間の休暇が取れるはずなのだが、どうなるのだろう。

(E-mail eiji.otsuki@nifty.ne.jp)

浅香辰也さん

会社勤め13年目になります。「現場、現実、現物、原理、原則、人間」(6げん主義)の大切さを日々実感しております。

禅洲 茂さん 仕事（売上）厳しいです。会社（ヤマハ）もきびしいです。社員として、企業として、どう生き残るかを実感しております。
皆様方のご健勝をお祈り申し上げております。

水尾寛己さん 昨年7月に旭区から南区に引っ越ししました。皆様のご活躍とご健勝を祈念します。

塚本義久さん 子供と年1回キャンプをする程度で、すっかりおとろえてしましました。現役のみなさんがうらやましい。

小森享二さん 会社に入って27年になります。そして長女がやっと大学を卒業して会社つとめを始めました。不思議なもので、子供が社会人になると自分はリタイアしたくなります。しかし、まだ大学2年と高校2年の娘がいますので、しばらくは辛抱しなければと考えています。

田村康一さん 3月末より社会復帰し、東京都民となりました。
(E-mail **koichi-t@kc4.so-net.ne.jp**)

その他、近況報告はありませんでしたが、出欠のはがきをいただいた方です。

紙村 徹さん (E-mail **kamimura@tr.kobe-ccn.ac.jp**)
小島 広海さん 、**松林孝憲さん** 、**高松康夫さん** 、**川尻哲夫さん** 、**折井亮夫さん**
小嶋健太さん 、**小原昌史さん** 、**河合武臣**です。

会員の三浦研さんがホームページを作ってくれました。

掲示板には若手OBの他、幹事長の小森さん、現役部員の書き込みもあります。
(チャットと他大学の探検部リンクもあり)
一度のぞいてみて下さい。

<http://www.gld.mmtr.or.jp/~miura-kr/cgi-bin/minibbs.cgi>

1999年 探検・探査の会 総会報告

1. 開催日・会場

- ・1999年4月24日（土） 14時～

2. 出席者

- ・河合、高松、小森（享）、川尻、田村、佐々木（仁）、松林（OB）
- ・本間、佐藤明（現役）
- ・その他、欠席ハガキの委任状を合わせると会員数の3分の1に達し、総会成立。

3. 会員数等

- ・98年度初め：72名
- ・年度途中退会者：1名（坂井善久氏：1979年入学）
- ・99年度新規入会者：1名（金子哲也氏：1994年入学）

→現役のOB会担当者に、新卒業生に対しての入会手続き、初年度会費徴収等を行ってもらう。

4. 探々会活動報告

- ・会報『探検・探査』の発行。

5. 会計報告

- ・別紙「会計収支報告」を参照

6. 現役活動報告

- ・別紙「1998年度探検部活動報告」を参照。
- ・98年度は、新入部員が5名入ったが、うち3名が退部した。

7. 役員改選について

- ・会長は引き続き大野氏に依頼する。
- ・幹事長：小森享（留任）、事務局長：川尻、会計：佐々木（仁）、会計監査：鈴木広視
- ・そのほかの役員として、河合：会報担当、田村：会報補佐、高松：渉外（大学との連絡調整）、松林：連絡調整（現役部員との連絡）

8. その他

- ・現役ボリビア遠征計画：OB会側の緊急時の窓口として、佐々木（仁）、松林。
- ・40周年文集：原稿の集まりが悪い。淡々と進めていく。

1998年度 探検探査の会 会計収支報告

(1998年4月1日～1998年3月31日)

a) 収 入

(単位:円)

◆ 会 費 収 入	-----	92,000	(13人)
◆ 利 息	-----	295	
◆ 小 計	-----	92,295	

b) 支 出

◆ 郵 送 代	-----	23,600
◆ コ ピ 一 代	-----	330
◆ 文 具	-----	3,570
◆ 会 議 費	-----	4,755
◆ 会 報 製 本 費	-----	36,309
◆ そ の 他	-----	262
◆ 小 計	-----	68,826

c) 単年度収支 ----- 23,469
(= a - b)

d) 前年度繰越金 ----- 181,092

e) 収 支 計 ----- 204,561
(= c + d)
(翌年度へ繰り越し)

1998年度 会計監査の結果、支出に際して例年同様に郵送・会報が主な費用であり、特段の指摘事項はありません。
また収入に際して、市役所も会費収入の確認をか願います。

1999年4月 日

鈴木宏視

編 集 後 記

探検・探査の会が支援を呼びかけた大きなイベントは、今月号の内容にもあるように学生部を主体に進められている南米ボリビア探検である。日本人移住100周年を記念してボリビア駐日大使の協力も得てインカ道、アマゾン下りを行う。日本隊は市大、中央、拓大、酒造会社員など混成チームである。ボリビア側も参加する。無事で成功し目的を達成されんことを期待したい。

原稿を寄せていただいた方ありがとうございました。遅れましたが第7号をお届けいたします。会員のみなさんの健康とご活躍をお祈りいたします。

探検・探査の会 会報誌 第7号

発行 横浜市立大学 探検・探査の会

代表 大野正夫

1999年6月